

ニューズレター発刊にあたって

本会は1985年に大幅な編集委員の交替を行いました（その経緯については、『フランス語学研究第19号』参照）。以来、編集委員会では本会の運営をよりオープンで風通しのよいものにするよう努力すると共に、本会の活動をより活発にし、機関誌『フランス語学研究』の内容をさらに充実するために様々な試みを行ってきました。

1990年度からは会の名称をそれまでの日本フランス語学研究会から日本フランス語学会に改めましたが、本会では総会に当たるようなものを開いておりませんが、そのため、会の運営や編集委員会の意図が誤解されていることも間々あるようです。また会員の方からの編集委員会に対する質問や要望があっても、それを誰に言えばよいのか分からないというような事もあるかと思えます。

そこで、編集委員会からの様々な情報や決定をお知らせすると同時に、会員の方々からの御質問や御意見にお答えする場としてこのようなニューズレターを発行することになりました。

この第1号では、会がどの様に運営されているかについて先ず大まかに説明しておくことにします。

1. 編集委員会について

本会には委員会と名のつくものは編集委員会しかありません。従って、会の活動に関わる総ての事は、事務局と編集委員会によって行われています。会全体を代表する会長のような役職はありません。ただ、『フランス語学研究』の編集のまとめ役として、現在は関東地方在住の編集委員の中から毎年交替で編集責任者を選んでいきます。また、例会やシンポジウムの企画・運営などを効率よく行うために、編集委員の中から関東3名関西2名の運営・企画担当委員を選んで仕事に当たっています。編集委員会は年に2、3度開かれ、会の運営と機関誌の編集全般について毎回、活発に議論が行われています。先に述べましたように、1985年に編集委員会の大規模な入れ替えがあった訳ですが、それ以降も編集委員の固定化を避けるために、毎年何人かの入れ替えを行っています。ただ、会の規模が小さいことと、実際に行わなければならない手弁当的な仕事の内容や地域間の連絡の都合上、機械的な交替は出来ませんが、今後も編集委員の交替は引続き行っていきます。（一度編集委員を勤めて退いた人も3年経てば再任できることになっています。）

2. 雑誌の編集について

1985年の編集委員の交替により、『フランス語学研究』の編集の仕方も大きく変わりました。第20号(1986)への投稿原稿から、レフリー制 *comit& de lecture* による実質的な審査により原稿の採否が決められるようになりました。日本でも、理科系の雑誌はもちろんのこと、最近では文化系の雑誌でもレフリーによる審査のあるものが増えてきましたが、欧米の権威ある雑誌でもこのようなシステムが当たり前になっています。

査読には原則として編集委員が、投稿原稿の内容に応じて当たっています。（内容によっては編集委員以外の会員に査読を依頼することもあります。）レフリーは、原稿を投稿した人や外部には匿名で、論文については最低3人が査読に当たります。各原稿のレフリーの内の一人が責任者となり他のレフリーの意見をまとめて、責任者会議で各原稿の採否が決定されます。一部には審査が厳し過ぎるという意見もあるようですが、論文として採用されるためには分析や説明に何らかのオリジナリティーがあるかどうか、新たな問題設定や新しい言語事実の発見

があるかどうかなどが基準となります。採否の決定に際してはできるだけ公平になるように努力していますが、それだけではなく投稿者が大学院生や若い研究者の場合はそのことも考慮していますし、また論文としては弱いと思われる場合でもそれなりに面白い視点があったり多少とも新しい言語事実の発見があったりするような場合は、研究ノートの形での採用を考えるなど、できるだけ多くの人に機会が与えられるようにしているつもりです。ただ、投稿する前に色々な人の意見を聞いてよりよい論文を書くためにも、投稿を希望される方はできるだけ先ず例会で発表されることをお勧めします。

また、若い研究者の方達は腕試しというか、学術論文の書き方に慣れるためにも先ず論評や研究ノートの形で一度投稿されるのもよいのではないかと思います。やはり学会誌ですので一定の水準を保たなければ『フランス語学研究』の存在意義が無くなってしまうわけですが、それと同時にできるだけ多くの人、それも若い研究者の研究が掲載されるように編集委員会でも今後ともいろいろと考えて工夫して行きたいと思います。日本では学問の世界でも時としてなあながまかり通っていることを思えば、採用方法が不透明であるよりも、多少採用基準が厳しい（実際にはそうではありませんが）ように見えても採用の手続きがきちんと決まっている方がずっと気持ちがいいと思うのですが。

レフリーは各原稿に対してコメントを書き、原稿が採用された場合もそのコメントが匿名で各執筆者に渡され、一ヶ月ほどの書き直し期間が設けられます。また、不採用になった場合も諦めずに、コメントを参考にして書き直し、次年度に再度投稿するという手もあるわけですが、大学院などで出している審査の無い雑誌になれていると、『フランス語学研究』に応募して不採用になると、若い会員の中にはショックを受ける人もおられるようですが、不採用も次の段階への一つのステップとポジティブに考えてください。

3. 学会誌の内容の多様化について

フランス語学会の会員は現在約300名を数えていますが、会員の中には文学を専門としておられる方など語学プロパーでない方も多くおられます。編集委員会では、そういう方達にも内外の最新のフランス語研究の成果を何等かの形で還元する必要があると考えています。そのために設けたのが、語法ノートや新刊紹介のコーナーです。この他にも、毎号掲載されている海外雑誌論文目録や、テーマ別基本文献案内などがありますが、これからも専門家、非専門家を問わず会員の方々の役に立つ情報の提供に努めて行きたいと考えています。

4. 例会、シンポジウム等について

現在一年間に8回の例会が開かれています。原則として4, 5, 6, 7, 9, 10, 11, 12月の土曜日に上智大学で開かれています。6月は仏文学会が開かれる週の金曜日午後にシンポジウムを、例会または特別発表を土曜日午前中に行っています。10月の例会は可能な場合は秋の仏文学会開催時に学会開催校で、そうでない場合は東京で開かれています。（今年の10月は東京の予定です。）また数年前から、11月の例会は関西（主として京都）で開かれています。

例会の案内は、6月の仏文学会開催時の例会に関しては会員全員に送られますが、それ以外の例会は住所・氏名を書いた葉書（『フランス語学研究』の表紙裏を参照）を事務局に送っている人にも送られます。関西で例会が開かれる場合には、葉書以外に主な大学の研究室宛にお知らせを送ったり、研究会などを通して口こみでも宣伝しています。このような形を取っているのは例会がおもに東京で開かれていることと、案内発送の仕事が大変なためです。時々、『フランス語学研究』の表紙裏をよく読まないで案内がきていないと文句を言われる方がいますが、どうか小学会の事情と会費の安さを考慮の上、ご理解下さい。確実に例会の予定を知るためには葉書を事務局に送っておいて頂くのが一番ですが、実際には、フランス人学者の特別発表（この案内は会員全員にお送りしています）やその他の案内をお送りする機会に、可能な限りついでに例会のお知らせなどもしていますし、お近くに編集委員がいる場合は遠慮なく例

会の予定をお尋ね下さい。

それから、例会での発表者を募集しています。発表ご希望の方は、事務局、または編集委員までお申し出下さい。

★企画・運営係より

6月以降の例会の予定は以下のようになっています。（題目は仮題です）

7月10日（土）上智大学 3時～6時

パネルディスカッション「程度表現をめぐって」荒井文雄、石野好一、川口順二

10月30日（土）上智大学 3時～6時

安城恭子（大阪府立大学） 「運動動詞」

田中敏彦（神戸外国語大学） 「ゼロ冠詞」

11月 於京都

日時・発表者未定（発表希望の方がおられましたら、東郷雄二、春木仁孝までお申し出下さい）

12月11日（土）上智大学 3時～6時

春木仁孝（大阪大学） 「代名動詞」

阿部 宏（東北大学） 「plus ou moins について」

また9月には Strasbourg 大学の Georges Kleiber 氏の来日にあわせて特別例会が予定されています。 9月22日（水）上智大学 3時～6時

★編集委員会報告

今回は第1号ということでお知らせすべきことが沢山ありましたので割愛させていただきますが、次回からは編集委員会での討議・決定事項についてもお知らせしていきます。

★事務局からのお知らせとお願い

事務局では会員名簿を作成中です。住所、電話番号、身分、所属などに変更がありましたら、事務局あてに葉書で御一報下さるようお願いいたします。特に最近住所不明で郵便が返送される場合が多くなっていますのでご協力下さい。

当学会員の国内雑誌紀要論文の目録を毎年作成し、『フランス語学研究』に掲載していますので事務局宛に抜刷をお送り下さい。よろしくお願ひします。（事務局）

★フランス語研究が出来る大学・大学院案内

次号から掲載予定です。

★『フランス語学研究第27号』編集責任者から

学問研究というと、いかにもいかめしく感じられますが、言語研究も、ミステリのようなものだと思うのです。一般にミステリは殺人事件が発生し、誰が、なぜ、どのように犯罪を犯したかを、探偵なり刑事なりが、調査し、推理し、そして真犯人を捕らえる、という課程を辿ります。このプロセスは、研究者が学問上の疑問を提示し、観察や資料に基づいて、仮説を提示するのと軌を一にしていると言えないでしょうか。優れた論文は謎ときの面白さに充ちていることが少なくありません。こういう論文を読むと、未知の物を発見する驚きやスリル、そして喜びが感じられますが、これも秀逸なミステリを読んだときに似ています。編集責任者として

は、このような醍醐味のある論文や研究を会員の方々に読んでいただきたい、そして投稿していただきたいと思いますが、第27号はいかがでしょう。（青井 明）

★研究会・読書会案内

この欄では、フランス語研究に関する各地の研究会・読書会・催しなどを紹介して行きたいと
思います。紹介記事の掲載を希望されるグループは事務局または編集委員までお申し出下さい

＜フランス言語学を一緒に勉強する会＞（仮称）

月に一回集まって、フランス語学・言語学の勉強仲間として情報交換や勉強したいという主旨で今年の4月から発足した会です。完成度の高い発表や報告をしたり聞いたりするというよりも、この会を勉強のきっかけとして活用したり、次の展開への足がかりにしたいというのが私たちの願いです。フランス語学・言語学に興味をお持ちの方は世代を問わず是非ご参加下さい。これまでの活動は、4月 川口順二「Pottier 理論レクチャー」、5月 藤田知子「tantについて」の2回の集まりを持ちました。今後の予定は次の通りです。

6月19日（土）3時～6時 慶応大学 三田、新図書館、小会議室

大久保伸子・F.ドルヌ「物語の冒頭におけるplan d'nonciation（2）」

7月17日（土）古石篤子「移民労働者子弟への言語教育一日・仏・スウェーデンの比較」む

お誘い合わせの上、是非ご参加下さい。この会で話をして下さる方を募集しています。ご希望の方は世話人までご連絡下さい。（世話人：川口順二、藤田知子）

★ニューズレター担当者より

初めて例会に来られた方や、たまにしか来られない方から、どうも解け込みにくいという感想を聞くことがあります。何百人と集まる学会とは違い、もともとこじんまりとした会なので、活動によく参加する人どうしは当然顔なじみが多くなりますが、初めての人には最初のうち多少居心地が悪い感じがどうしてもあるようです。しかし、あくまでもオープンな集まりですから、2回、3回と参加しているうちに顔なじみの人もでき、すぐに解け込めるものです。例会の後では、必ずポスト例会で軽くビールを飲みに行ったりしますので、顔なじみの少ない人は是非こちらの活動にも参加して頂ければ、知合いも早くできると思います。例会によく来られる方も、自分が初めて参加したときのことを思い出して、新しい方にちょっと声をかけてあげて下さい。

このニューズレターも、会員の間でのコミュニケーションの一助になればという考えから発案されたものですが、第1号はいかがでしたでしょうか。

ニューズレターに対してだけでなく、事務局や編集委員会へのご意見・ご要望・ご質問等がありましたら、ご遠慮なく事務局または編集委員まで出来れば文書でお寄せ下さい。なお、その時にはお名前をお忘れなく。
（春木 仁孝）